

2020 年 11 月 23 日

日本ヘルニア学会
評議員 各位殿

症例登録委員会委員長 宮崎 恭介
理事長 早川 哲史

National Clinical Database (NCD)における鼠径部ヘルニア手術、新規入力をお願い

謹啓、時下、評議員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

日本ヘルニア学会では、ヘルニア疾患の症例登録を行い、ヘルニア疾患の診療の質を改善させることを目的に、2016年に症例登録委員会を発足させました。そして、日本で症例登録を行うにはNCDデータを活用することが得策と考え、2017年に消化器外科データベース関連学会協議会に参加し、2018年からNCDにおける鼠径部ヘルニア手術のデータ抽出が可能となりました。その結果は、日本ヘルニア学会誌に報告しております(文献1)。2017年の鼠径部ヘルニア手術症例数は110,252例でした。しかし、現在のNCDにおける鼠径部ヘルニア手術のデータは、外科専門医の共通項目のみで、左右の区別、初発・再発の区別、詳細な手術術式(Lichtenstein法、Mesh plug法、TAPP、TEPなど)、鼠径部ヘルニアの分類など、日本ヘルニア学会として把握したいデータが全くない状況です。

そこで、日本ヘルニア学会は消化器外科データベース関連学会協議会と協議を重ね、鼠径部ヘルニア手術について、新たに4つの入力項目を追加することになりました。追加4項目の詳細を資料1、2に示します。この新たな症例登録は、登録をしていただける施設・診療科を日本ヘルニア学会からNCD側に提出し、NCD登録施設と紐付けすることによって、新規入力が始まります。新規入力の開始時期は、2021年4月以降を予定しております。

ご存じの通り、日本ヘルニア学会では、2006年版鼠径部ヘルニア分類(JHS分類)を考案し、現在、国内では、多くの学会員の皆さまに周知されております。しかし一方で、世界に目を向けますと、鼠径部ヘルニアの国際ガイドラインでは、European Hernia Society分類(EHS分類)が鼠径部ヘルニアの分類として推奨されており、今やEHS分類が世界標準の鼠径部ヘルニア分類となっております。日本ヘルニア学会としては、EHS分類に準じて国際化に歩み寄ることが、今後の日本ヘルニア学会の発展に繋がっていくであろうと判断いたしました。NCD登録では従来の鼠径部ヘルニア分類(JHS分類)を変更し、EHS分類に準じた「2021年版鼠径部ヘルニア分類(新JHS分類)」を採用します。

つきましては、現在、日本ヘルニア学会の評議員となっている施設においては、積極的NCDにおける鼠径部ヘルニア手術の新規入力にご参加して頂きたいと考えております。これは、あくまでもお願いであります。評議員のご施設が率先して新規入力に協力して頂くことで、多くの会員の施設でも参加していただけるようになり、結果としてできる限り多くの施設・診療科で新規入力して頂きたいと考えております。数年後には、鼠径部ヘルニア手術におけるより詳細なデータを蓄積して、鼠径部ヘルニア手術の質の改善に貢献していきたいと考えております。今後、将来的にはロボット支援手術を開始する施設が増加すると推察されます。日本ヘルニア学会としましては、ロボット支援手術を現在すでに行っている施設と今後行っていくことを検討している施設には、必ずNCD登録に参加していただきたいと考えています。

何卒、できる限り多数の施設から参加登録を、宜しく願い申し上げます。

謹白

文献 1. National Clinical Database における鼠径部ヘルニア手術～ Annual Report 2011 - 2017 ～:宮崎 恭介, 早川 哲史, 稲葉 毅, 上村 佳央, 川原田 陽, 嶋田 元, 諏訪 勝仁, 宋 圭男, 諸富 嘉樹, 長江 逸郎, パウデルサシーム, 松原 猛人, 柵瀬 信太郎, 松本 純夫, 福地 絵梨子, 宮田 裕章, 掛地 吉弘, 瀬戸 泰之:日本ヘルニア学会誌 2019. Vol5/No2 3-9